太陽と月の諍いと敵対

――フィリピン、インド、およびマレー半島の諸神話への寄与――

ルドルフ・ラーマン
森田　未咲　訳

序

フィリピン諸島、インド、およびマレー半島には、太陽と月との諍いと敵対に関連した神話群が存在する[1]。本稿において筆者は、特にフィリピンに関する限りでは、民族学的文献から収集した資料を提示し、そして文化的共通要素を多くもつ一地域の３つの地方にみられるこの神話群の主な特徴を試験的に比較してみたい。

フィリピンの所伝

Percy A. Hill は以下の星辰神話を発表している。

原初の頃、太陽神アラオ Arao と月女神ブアン Buan の両者には星の家族がたくさんいた。アラオの星たちは黄金色であり、とても光り輝いていた。一方、ブアンの星たちは全く熱くない白銀色であった。ブアンは彼女の星たちがアラオとその子供たちの熱と光に耐えられないということに悩むようになった。それゆえに、彼女は安全策として両者とも自分の子供たちを殺すということをアラオに約束させた。これに彼らは互いに同意した。

太陽が彼の星たちを貪り食った後で、月は彼女の星たちを雲の影に隠した。そこから時々彼女の星たちが現れた。これを見て太陽は、月の悪賢い騙しに当然激怒した。結果、月が子供たちを守るために太陽を騙したとして、太陽は月を殺す為に永遠に月を追いかけている。

1　二つの大天体の名前は統一性を図る為、大文字になっていない出典からの引用も含めて、本稿では大文字で書く。

その追撃は原初からずっと続いている。時々、太陽は噛みつくのに十分なくらい月に近づく。これが蝕である。追手が月に近づき、そして月がより高いところにある暗がりに避難する間に、月は絶えず満ち欠けするため、時がその傷を癒してくれるのである。

太陽は夜明けに戻って来て星たちを食り食うか、あるいは星たちを逃走させる。一方、月は昼間に星たちを隠しておいて、月の最年長の娘で宵と明けの明星であるタラ Tala が、太陽がずっと遠くにいて星たちに追い付くことができないということを助言してくれるときにだけ、月は星たちを外に出すのである[2]。

インドおよびマレー半島における類話

すでに述べたように、この神話は北東部および中部インド、そしてマレー半島において非常に近似した類話を持っている。現在、その関連文献のほとんどを自由に使えるわけではないので、筆者はインド北東部の非アーリヤ系諸部族の神々について、筆者の研究論文に載せた要約からこの神話の大体の内容を示す。インドにおいて、この神話はサンタル Santal、ムンダ Munda、トゥリ Turi、サヴァラ Savara、ビルホル Birhor の中に見つかる。これら全ての部族はムンダ諸語を話す。神話はさらにアーリヤ語を話すブイヤー Bhuiya の中にも見つかるが、彼らはかつてムンダ諸族であったと思われる[3]。

問題の神話はおおよそ以下の要素を含んでいる。月が太陽の子供たちを捕え、その子供たちでもって美味しい料理を作り太陽に食事を出す。あるいは月は太陽に太陽自身の子供たちを殺して彼らを食べてしまうように誘う。月の行為の動機は、太陽のたくさんの子供たちが原因である地上における酷熱である[4]。サンタル、そして恐らくサヴァラにおいても、太陽と月は夫妻として現れる。ムンダとトゥリにおいては太陽と月は姉妹〔または妹姉〕であり、ビルホルでは兄妹〔または弟姉〕である。ブイヤーでは太陽は男性で月は女性であり、それら互いの関係性には言及されていない[5]。

ムンダの所伝では、太陽は彼女の姉〔または妹〕である月の行為に激怒し、「剣を掴んでその姉〔または妹〕を追いかけ、追いつくと月を二つに斬り裂い

2 Hill, *Philippine Short Stories*, pp.65f.

た」と言われている。その両半分は一定期間で再びくっつく。しかし、シング・ボンガ Sing Bonga、すなわちムンダの（現在の）高神である太陽神は、月がその行為のゆえにいかなる罰を被ったかを地上の人間たちが見ることができるように定期的に再びその傷が開く様に定めた[6]。太陽神シング・ボンガとこの神話とのつながりは、いささか不適当であるが故にまず元の要素ではありえない。実際問題、太陽としての高神の特徴はおそらくムンダの信仰においてより後期の要素であろう[7]。ムンダ（ホー Ho とブーミジ Bhumij はどちらもムンダに密接に関係している）に関して、Dalton は今提示したものよりもっと新しいと考えられるもう一つの所伝について述べている。「彼（シング・ボンガ）はチャンド・オモル Chando Omol、つまり月と結婚していたと言われているが、月はある時彼を騙し、彼は彼女を二つに斬った。しかし怒ったことを後悔し、彼は時々完全な美しさで輝き現れることを彼女に許した。星たちは彼女の娘たちである[8]。」

インド先住民に属し、その一部は未だ採集民であるビルホルの神話では、明けの明星［Venus］は、太陽が他の星たちを食り食っていたちょうどその時、遠い踊り場におり、それゆえに彼女は助かったとされる。また、サヴァラの所伝でも月が金星を隠すことができる。

3　Rahmann, *Gottheiten*, pp. 55－57　本稿では以下 *Gottheiten* として引用する。そこに付した参考文献は以下のとおりである。サンタルについては、Mitra, p.70〔この論文は Man in India, vol. 8 (1928) の p.248－258にある〕；Bodding, p.73；Monfrini, pp.17f.；Census1931, VII, I, 297；ムンダについては、Mitra, p.70；Bhaduri, pp.76f.；トゥリについては、Russel, IV, 591；サヴァラについては、Thurston VI, 333；ビルホルについては、Roy, pp.486f.；ブイヤーについては、Russel II, 317f.

一方、Elwin はその著書 *Myths of Middle India* の中でこのタイプの話を多数発表している（cf. pp.53, 55, 56f., 74f.）。Elwin によって記録されたその他の話の中に、他のモチーフが見られる。それらは一部には「アーリヤ的（Aryan）」というべきであろうが、幾つかは特にヒンドゥー的な特徴を有している。Elwin の *Myths of Middle India* と筆者の *Gottheiten* 中の参考文献の注釈は相補的なものであるが、その範囲と彼の著作のほうがより新しいことから、Elwin のものがより包括的である。本稿は Elwin の *Myths of Middle India* を「Elwin」として引用する。

4　「太陽とその子供たちから発せられる酷熱は、あらゆる生物を苦しめた」（ビルホルの所伝。Roy の pp.486f. を引用している Elwin, p.75を見よ。）

5　Elwin は「太陽と月の性別については、非常に曖昧さがある」と述べている（p.52）。少し後に、彼は「多くの部族が二つの大きな天体を夫と妻とみなしている」と書いている（pp.54f.）。

6　*Gottheiten*, p.56.

7　Ibid., p.93.

8　Ibid., p.56, Dalton, p.186〔p.184〕を参照している。

マレー半島において、Mitra の詳細ではない報告によればマレー Malays[9]の中に、Schebesta によればジャハイ―セマン Jahai–Semang[10]とプレ―サカイ Ple–Sakai[11]の中に神話が存在する。セマン Semang はネグリト Negrito に属し、サカイ Sakai は東南アジアのネグリトイド Negritoid に属す。Mitra によれば、太陽は男性で月は女性であるが、彼らは夫婦としては現れない。ジャハイ―セマンにおいては、太陽は女性で月は男性である。プレ―サカイでは、両者は女性である。プレ―サカイはその神話の中で、月が腋窩に自身の子供たちを隠し、太陽に月の子供たちが死んだと思わせてから、太陽に彼女自身の子供たちを呑み込ませるように誘ったとしている。ジャハイ―セマンの神話では、太陽が他の星たちを呑み込んでいた際に月が彼の腋窩に隠した「2人の年下のきょうだい」（弟と妹か？）がいたとされる。それら2つの隠されていた星に、明けの明星と宵の明星として2つに数えられる金星が意図されていることは疑い得ない[12]。おおよそセマンやサカイと同等の文化水準にあるビルホルとの類似は顕著である。もちろん、この類話が古い要素なのかそうでないのかを確かめるためには詳しい研究が必要である。

神話の性質と内容

この神話群を構成している物語は世俗的なものである。その上それらは説明神話である。次の天文学的諸事実が説明されている。第一に、空において月が星と共に現れること、そして太陽は（明け・宵の明星を除いて）星と共には現れないということである。第二に、月の満ち欠けと空におけるそのゆっくりとした動きである。

フィリピンの神話とインド、マレー半島の神話の関係性

フィリピンの所伝に戻ろう。筆者はこの話が諸島のいずれの場所から収集さ

---

9 *Gottheiten,* p.56.

10 Loc. cit., Schebesta, *Über die Semang,* p.1010と *Bei den Urwaldzwergen*, p.101を引用。

11 *Gottheiten*, 同引用文中に Schebesta の *Orang Utang,* p.68と *Bei den Urwaldzwergen,* p.229を引用している。

12 Elwin, p.74, Bompas の p.403を引用している。Bompas は、太陽は自分の子供たちを「2人以外」全て食り食うが、「助かった2人は明けの明星と宵の明星である。」というサンタルの所伝を報告している。バイガ Baiga の所伝にも同様にこのモチーフがある（Elwin の同引用文中）。後者についてもまた Elwin の *The Baiga,* pp.331ff. を見よ（著者の注釈から引用）。

れたのかわからなかった。これはいまだ確認を要する点である。しかし、インドおよびマレー半島の説話とフィリピンの説話の起源的な関係性は疑い得ない。上に言及したアジア大陸本土の諸部族のほとんどが同じ語族に属しているので、一層そのように考えられる。

少なくとも、神話のそれらアジア本土の所伝、そこでは太陽と月が神々とはみなされていないのだが、その所伝が恐らくより古い形であるので、その結果必然的に、太陽と月がこのモチーフに関係する限り神々として表現される説話が、神話群のより新しい所伝であると我々は想定しうる。太陽と月を夫婦である神々とする観念はインドにも見つかる。すなわち、先に言及したムンダの第二の所伝中に、である。

アラオとその子供たちから生じる酷熱のモチーフにはすでに言及したようにインドの類話がある[13]。

宵・明けの明星であるタラがフィリピンの神話の中でもつ特別な立場は、ビルホル、サヴァラ、ジャハイ—セマンの所伝における金星の役割に相当する[14]。

---

13 サンタルのある所伝では、このモチーフの更に発展したものが見つかる。「太陽、それは至高的存在とみなされるのだが、その太陽は人間をその邪悪さのために殺すことに決め、人も獣もその苦痛に身もだえするほど激しく燃え盛った。」(Elwin, p.53)

ムンダに近いドラヴィダ語系の部族であるオラーオン Oraon の所伝では、太陽としての7人の兄弟が現れる。「月が太陽の熱を止める為の手段を取らない限り、太陽の熱で世界が溶かされてしまうという訴えが月へと向かった。」月は（第一の）太陽に彼自身の兄弟を食べるように誘った（Elwin, p.53)。スマトラのバタック Batak のある神話はオラーオンのものと非常に類似している（cf. Benedict, p.47, fn. 102, Warneck, pp.43－44を引用)。シッキムのレプチャ Lepcha の所伝では太陽は二人の兄弟である（op.cit., p.54)。Ao Naga の話では、「太陽は人々がその熱さに不満を訴えたことに腹を立てて、再び輝かせるためには雄鶏が太陽を騙さなければならなかった」(loc.cit)。雄鶏によって演じられる騙しのモチーフは、カチン Katchin、ロロ Lolo、ミャオ Miao、タイ Thai のような人々に広まっている他の群とこの話型とを関連付けている。話の中で蟾蜍が太陽の年上の兄弟を矢で射落とすという先ほど言及された Lepcha の所伝の中にも現れる、雄鶏の仲介に先立って、人々によって太陽が射られるといったモチーフもまたこの群に属している。この（矢で太陽を射る）モチーフは、ナバロイ Nabaloi のある所伝にも見つかり（下記を見よ)、フォルモサ Formosa のアタヤル Atayal の中にその類話を持っている（Scheerer, pp.47f., Norbeck, p.9〔p.16〕)。「矢と雄鶏のモチーフ」が属する純粋な群は、太陽の敵対者が月ではなく、人間（先ほど言及したアガリア Agaria の神話においてのように）である。筆者はこの群についての詳細を他の論文で示したいと望んでいる。

14 C.W.J.van der Linden は、タラ Tala が、サンスクリットで星、輝きなどを意味し、ルドラ Rudra やヴィシュヌ Vishnu の形容詞でもある tara と関連付けられているはずであるということに筆者の関心を引きつける（cf. Monier-Williams, p.370)。この顕著な類似は、無論特別に興味を惹く。しかし、この所伝のフィリピン型の時期を判断するためにはそれ自体ではほとんど断言できないと思われる。

フィリピンのその他の所伝

本稿の最初に挙げた神話の他に、フィリピンには、最初の神話のモチーフを幾つか欠き、他の要素を含んでいる太陽と月についての説話がある。

パンパンガ Pampanga（ルソン島）の神話においては、Fansler は「キリスト教によって修正されていない、古代の純粋なものである」とみなしているが、太陽と月は創造主であり支配者であるバタラ Bathala の二人の子供たち、すなわち彼の息子アポラクイ Apolaqui と彼の娘マヤリ Mayari として現れる。バタラは彼らを優しく愛し、そして常に彼らと共にあった。しかし、彼が老い、弱くなると、彼はもはや彼らの行動についていくことができなかった。彼は彼らに彼のところにとどまるように頼んだが、彼らはその願いを心に留めなかった。ある日、バタラは遺書を書き残すこともなく突然死んだ。アポラクイは地上を一人で支配したいと思った。彼の妹〔または姉〕はその提案を承諾することを拒み、そして両者の間に激しい争いが起こった。「しばらくの間、彼らは竹の棍棒で戦った。ついには、マヤリはその片目を抜き取られた。アポラクイは彼が自分の妹〔または姉〕にしたことを見て、彼女に対してとてもすまなく感じた。そして、彼らが地上を別々の時間に等しい力で動かすべきであると言った。それ以来、アポラクイは、今太陽と呼ばれているが、日中地上を支配しており、彼の眼から我々は輝かしい光を受けているのである。マヤリは、月と呼ばれているが、夜に世界を支配している。しかし彼女の光は、彼女が片目しか持たない為に、彼女の兄〔または弟〕の光よりも弱いのである[15]。」

太陽と月のあいだの争いは、Fansler が同様に古いパンパンガの伝承であるとみなす、２つの短いパンパンガンの子守歌の主題にもなっている。その一つは次のようである。

Ing bulan ilaning aldo

15 Fansler, *Filipino Popular Tales,* p.406. タガログ Tagalog の神話とパンガシナン Pangasinan の神話もまた、何故月の光が太陽よりも弱々しいのかということを説明している（ibid.,pp. 405〔404f.〕）。

Mitatagalan la baho

Pangaras da quetang cuarto

Nipag sundang, mipagpusto

「お月様とお日様はお互いに、高いところで追いかけっこ。二人がお部屋に入ったら、脇から短剣取り出して、お互い戦いの準備は万端だ[16]。」

ビサヤ諸島の所伝では、太陽と月は結婚しており、星たちは彼らのたくさんの子供たちである。「太陽は彼の子供たちをとても愛していたが、彼がその子供たちを抱きしめようとするたびに、彼は子供たちを焼き払ってしまうのだった。このことに月はとても腹を立てたので、ついには彼に子供たちに再び触れることを禁じた。」しかしある日、月が洗濯をしに泉へ出かけていた時に、太陽は再び彼の子供たちに近づき、彼から発する酷熱によって幾らかの子供たちが死んでしまった。月は、今度はバナナの木でもって夫をぶん殴ろうとしたが、太陽が彼女の顔に砂を投げた。そして今日まで暗いしみが月の顔面にみられるのである。「それから太陽は月を追いかけはじめ、時々彼がほとんど彼女を捕まえられるほど近くに追い付くが、彼女は逃げ、そして間もなく再び遠く先の方へ行ってしまうのである[17]。」

ミンダナオのプロト―マレー proto-Malayan マノボ Manobo の所伝はビサヤのそれとほとんど一致する。太陽はカッとなって月の顔面にタロイモの葉っぱを投げつける[18]。

太陽と月のあいだの状況の変化を伴った、太陽によるこの永続的な月の追跡はミンダナオのマンダヤ Mandaya の話のモチーフの一つでもある。その他については、その説話では太陽の怒りの行為の結果として星たちの存在が説明されている。つまり、太陽と月の最初の子供は太陽がバラバラに斬り裂いてしまう大きな星であった一今の星たちである。夫婦のもう一人の子供は海の底の大

16 Loc.cit.

17 Mabel Cook Cole, p.201.

18 Garvan, pp.225f. ; cf. Beyer. p.91, および Benedict, p.48, fn. 103.

きな穴に住む巨大なカニであった。その目の動きは雷光の原因である。彼が穴を離れるときが干潮の原因であり、大きな波については彼が動いたことによる。その父親と同じような気質であるため、彼は時々その母を呑み込もうとする。地上の人々はそのような災難の脅威を、鐘を打つことで防ぐ。カニの説話は2つの別の群に属している。すなわち、大地を支えているということ（この機能ははっきり述べられているわけではないが）と蝕の原因であるということである[19]。

ミンダナオのバゴボ Bagobo については、「太陽と月はかつて結婚しており、星たちは皆彼らの子供たちであった」と Fay–Cooper Cole が簡潔に報告している[20]。Benedict による詳述には、この「広く語られる話」がマンダヤの所伝ととても類似しているということが示されている。「いずれの星も月の幼い娘の体の小さなかけらの一つであり、その娘は太陽が彼女の誕生の際に、その子供が男の子ではなかったということに酷く失望したために殺し、小さなかけらに斬り裂いたのである。」赤子の末路をめぐる激論の結果、彼らはもはや一緒に旅することは望まなかったのである[21]。

さて、山岳地域 Mountain Province（ルソン島）のプロト―マレーに説話を移ろう。太陽と月の闘争はイフガオ Ifugao の最も一般的な神話の一つである。「少年や少女たちが暗唱できるのがこれらの一つであり」、子供たちがそれを通して「太陽と月に対して畏敬の念をもつこと」を教わる伝説の一つである。二人の内、誰がより輝ける者であるかについての彼らの闘争に決着をつけるために、太陽と月は最後まで戦うことを決めた。これは、太陽の側についた人びとが祖先に異なる動物の生贄を供犠し、「太陽が有利になるよう戦いに介入してくれ

19 Madel Cook Cole, pp.145f. ; Fay–Cooper Cole, *The Wild Tribes of Davao,* p.172, Benedict, p.47, fn. 101も見よ。「大地の支え」と「蝕の原因」のモチーフの用語は Elwin, pp.509, 508。蝕のモチーフは Hill によって発表された説話にも含まれている。「時に太陽は彼女（月）に噛みつくのに十分なほど近づく。これが蝕である。」（Hill, p.66；上記を見よ）

20 *The Wild Tribes,* p.108

21 Benedict, pp.46f. Benedict は（「自然現象に結び付けられる他の幾つかの神話」と共に）説話の全てを *the Journal of American Folk–lore*, 26：15－19, 1913に挙げている。Martin の *Die Inlandstämme der malayischen Halbinsel,* p.977を引用し、同著者は（p.46, fn. 99で）「永久に星の子供達を破壊しようという試みに従事する太陽を描いた Mantra の所伝」に言及している。

と彼らに懇願する」というイフガオの社会において祖先たちがもつ重要性に一致する[22]。最終的に太陽は石灰（キンマを噛むために使う）を煙草入れから取り出して月の目に浴びせかけ、それによって太陽の敵対者は目が見えなくなる[23]。

Barton はイフガオの話の多少違った所伝を挙げている。太陽と月は、「酔っぱらって得意げに話しており、その後で太陽は月の帰り道に石灰の入った袋を引っかけ、月にその袋を突くよう挑発した。月はその挑戦を受け、その結果石灰が彼の目を焼いた。しかし彼は回復し、太陽の道に槍の罠を仕掛けることで報復した。太陽は罠の上を歩き、突き刺さって死んだが、復活した。」もう一つの所伝では月は太陽の罠に落ちる[24]。

ナバロイ―イゴロット Nabaloi-Igorot は２つの天体の明るさについて３つの説話をもっている。一つめによれば、太陽と月はかつて同じ明るさであった。「交互に地上を照らし、交互に地下世界を照らした。それ故常に昼間であった。」しかし、月はいつも神カブニアン Kabunian[25]を、彼が結婚していないという理由で笑った。ある日、カブニアンはカッとなって「月の顔面に灰を投げつけた。今ではより好ましいことに昼夜がある[26]。」二つめの話は同様に、同等の明るさというモチーフを含んでいる。しかし、その中で月は太陽の独身を笑い、太陽は怒って燃え盛る灰を月の二つの顔面の内、片面に投げつける。「月の顔は焼け焦げて真っ黒になった。けれども月の顔の片面だけは輝くことができた。その顔は灰のために太陽の光のようには輝かないのである。そして月は毎晩は輝こうとはしなかった[27]。」三つめの話によれば、ずっと昔、月は太陽よりも明るく輝いており、人びとは当時普通であった状況に従って働き、眠って

---

22 Lambrecht, pp.359ff.

23 Sals, p.73.

24 Barton, pp.67f. この著者〔Barton〕はこの論文の原稿を H.Otley Beyer に示した時、1912年頃、当教授が Father Juan Fernandez Villaverde,O.P.によって元々収集されていたイフガオの神話の詳細な所伝をスペイン語から英語に翻訳し、注釈をつけていたことを知った。Beyer は今、この神話の公刊の準備をしている。

25 Moss は Kabunian に関する彼の見解を *Nabaloi Law and Ritual,* pp.280f. に挙げている。

26 Moss, *Nabaloi Tales,* p.239.

27 Ibid., p.241.〔この所伝では月は、一つは前方一つは後方にある二つの顔を持っており、一つは高みの人びと、一つは地上の人びとのために輝いていたと説明されている（ibid）。〕

いた。しかし、太陽は月の明るさを妬んだ。彼は月をだまし、月の顔面が木の大枝に打たれることとなった。「それ以来、月は明るさを失ったのである[28]。」別の群、すなわち「諸世界の階層[29]」に関する群に属すると思われるもう一つの説話では、地下世界の男が太陽を矢で射当てる[30]。

明るさの問題と共に、以下にあげる山岳地域の最北端に住むイスネグ Isneg[31] の説話は昼と夜にも関連していると思われる。

「太陽と月が争っており、その争いに決着をつけることにした。太陽が……月に松明を投げつけ、それゆえに月の顔面には火傷の痕がある。月は太陽に箒を投げつけ、それゆえにその光線は箒の小枝のように目を冒す。イスネグによれば、太陽は月を覆うために優位に立ち、以降彼は昼間に出歩いている[32]。」Wilson によって記録された短い所伝には、同様に諍いの要素、それぞれ松明と箒を投げる要素、月の薄暗い光、そしてその顔面の火傷の痕といった要素が含まれている[33]。

アブラ州 the Province of Abra のティンギアン Tinguian の神話では、太陽と月は大精霊カダクラン Kadaklan によって創られた。彼らは「互いに地上を上に下にと追いかけ回る。時々月は太陽をほとんど捕まえるところまで近づくが、いつも疲れて、成功する前に諦めてしまう[34]。」もう一つの所伝は、闘争、太陽の酷熱、太陽によって月の顔面に砂が投げられるといったモチーフを明確に含んでいる。この所伝では太陽は月に「……もし私がお前に全く光を与えてやら

---

28 Ibid, p.239.

29 モチーフ用語は Thompson, p.488から。

30 Moss, op. cit. p.233. 上記 fn. 13の最後の段落を見よ。*Bontoc Igorot* の神話における二つの大きな天体の諍いは首狩りに関連している。月は太陽の息子の頭を切り取った。父親はそれを戻して、少年は生き返った。そして太陽は月に言った。「ごらん、君が私の息子の首を切り落とした所為で、地上の人々はお互いの首を切っているじゃないか。これは今後も続くだろう」(Jenks, p.221)。Norbeck (p.9) はこの話に「月もかつての太陽」という要素と「いつも昼間であった」という要素を考えている。筆者の見解ではそれらのモチーフはそこに含まれてはいない。

31 アパヤオ Apayao とも呼ばれる。

32 Vanoverbergh, p.1012.

33 Wilson, p.40.

34 Fay-Cooper Cole, *Traditions of the Tinguian,* p.189 ; cf.p.221.

なきゃ、お前はひどいもんだぜ。」と、近代の天文学的知識を表しているように思われるような主張をしている[35]。

前述のフィリピン諸伝の概略

前述した諸伝のうち、パンパンガ、ビサヤ、マノボ、バゴボ、イフガオ、イスネグ、ティンギアンのものには闘争のモチーフが含まれている。そしてビサヤ、マノボ、マンダヤ、イスネグ、ティンギアンのものには逃走のモチーフも含まれている。太陽によって月の顔面が傷つけられるあるいは暗くなるといったモチーフはパンパンガ（月の片目を見えなくさせる）、ビサヤ（砂）、マノボ（タロイモの葉）、イフガオ（石灰）、ナバロイ（灰、ある話では燃え盛る灰、そして木の枝）、イスネグ（松明）、ティンギアン（砂）の所伝の内に現れる。

現在とは異なる宇宙秩序の在り方はパンパンガ、イフガオ、ナバロイ（3つの所伝の中に）、イスネグの所伝、そして恐らくビサヤやティンギアン（太陽が熱すぎる？）の所伝にも表されている。

インドの類似のモチーフ

闘争、月の顔面の暗さ、異なる宇宙秩序といったモチーフの比較に絞って今一度インドについてみてみよう。

闘争のモチーフに関しては、Elwin によれば、中部インドに太陽と月がどうして常に離れているのかを説明する伝説群が存在するが、両者は夫と妻とはみなされていない。「はっきりした説明は諍いがあったということであり、そしてこれはしばしば月が太陽に彼の子供たち、昼間に輝いていた星たちを殺させるといった騙しに関連している[36]。」

月の顔面の暗さのモチーフは3つのアッサム Assam 諸部族の所伝中にみられる。ラケール Lakher の説話では、怒った未亡人が月の顔に彼女のビール

35 Ibid., p.192；cf.p.223. Mabel Cook Cole, p.65.
36 Elwin, pp.54f.

ジョッキのゴミを投げつける。それ以前月は明るく、太陽のように熱かった。カーシー Khasi の伝説は月がその姉である太陽[37]との結婚を望んだことに関連しているが、月の近親相姦の意図に対して抗議し、彼女は熱い灰を彼の顔面に投げつけた（ナバロイの燃え盛る灰やイスネグの松明を想起させられる）。「それ以来、月の光は青白くなり……そしてそれが彼が昼間にその顔を表さない理由である[38]。」ロタ・ナガ Lhota Naga の所伝では、「今の太陽である天体は今の月であるものの顔面に牛糞を塗りつけた[39]。」ベンガルのブナ Buna は、太陽がその諍い最中、その妹〔または姉〕である月の顔面に泥を投げつけたと語っている[40]。

異なる宇宙秩序のモチーフは、今言及した話に含まれているように月の顔面の暗さというモチーフと複合している。ブナの説話においては、「月はかつて太陽よりも輝いていた」ということがはっきりと言われている[41]。

このモチーフはオラーオンの所伝にも見つかる。これまで７つだったのに対して現在太陽は一つである[42]。ロタ・ナガの所伝に対する注記中で Hutton が述べるには、セマ・ナガ Sema Naga の所伝の中では「ある男が太陽に牛糞を投げ、それが月になった。もう一つのアッサムの所伝では灰が投げられ……すべて結果は同じである。より熱い天体がより冷たい天体に変わるのである[43]。」このモチーフの教訓的なレベルへの展開は北部インドと中央州 Central Provinces の伝統的な考え方にみられうる。北部インドでは太陽は反抗的な息子として現れ、一方彼の妹〔または姉〕である月は恭順な娘である。太陽は彼の母に何もあげることをせず、罰として「彼は以来ずっと燃え続けることを運命づけられている。」中央州の伝統的な考え方では、太陽は欲深く、彼の母親のために結

37　太陽、つまり二つの天体の主要な方が女性であるということはカーシー社会の母系的特徴に合致する。
38　Elwin, pp.53, 55f.
39　Ibid., pp.53f.
40　Ibid., pp.55.
41　Loc.cit.
42　Elwin, p.53.
43　Mills, p.196, fn.1（J.H.Hutton による注釈）

婚式の祝宴から家に何も持ち帰らなかった。一方で彼の妹〔または姉〕である月は持ち帰ってきた。母親はその息子を呪い、「そして太陽は母の魂を満足させることを疎かにしたので彼は常に燃え続けるべきであるが、月は母を満足させたので、彼女は常に涼やかなままであれと言った[44]。」

結

これらの小論は、包括的な論じ方が期待できそうな神話群に関する予備的な意見として言おうとしているだけである[45]。筆者は、上述された幾つかのモチーフは広く、そして世界的にも存在することに気がついている[46]。一方で、インドとフィリピンの間には部分的に文化的関係や言語的関係があるので、起源的なつながりは神話の分野でも、そして民間伝承一般の分野でも期待されるであろう。

さらに2つの見解が許されよう。第一に、アンダマン・ネグリト Andaman Negritos の間では太陽と月は通例結婚した夫婦であり、星たちは彼らの子供たちであるとみなされる。あるグループ、アカ—ジェル Aka-Jeru が月を貪食であるとみなしていることは恐らく重要である[47]。Wilhelm Schmidt は、アカ—ジェ

---

44 Elwin, p.54.

45 のちに Dr. Fansler は彼の（フィリピンの）民間伝承における未発表の原稿集積の内、説明的な（因果関係論的な）説話のグループ中に、月に関する11の話と太陽に関する3の話があると書いている（*Philippine Folk Literature,* p.209.）。しかし、Fansler の集積は見たところ「多数のキリスト教化された部族の」集団に限定されている（cf. p.208.）。

46 Barton は太陽と月の間の諍いの神話は「インドネシア〔やポリネシア〕やアメリカに広がっている」（p.39；cf. p.67）と主張している。Norbeck は一方 Apayao（Isneg）,Nabaloi、Bontoc（しかし上記脚注30を見よ）と、もう一方（プロト—マレーと同様に）北部台湾の Atayal との間のモチーフの類似を指摘している（pp. 8 f., 16；cf.pp.12f. も）。アメリカに関しては、エスキモー Eskimo と（スペリオル湖の西と北の）中央ウッドランドのインディアン Indian の間で、太陽の妹〔または姉〕が月である兄〔または弟〕によって追跡されるというもう一方のモチーフが見つかる。（Thompson, p.306, 308）。
星辰神話自体については Thompson が次のように書いている。「我々は、最も原始的な人々が実際天体に関心をもっているということには何の確証もなく、もっともらしいとも思われない（p.384；cf.p.238, 西アジアとヨーロッパに関して；p.312, 北米インディアンに関して）。地理的に限られ不十分ではあるが、この研究は、南アジアとマレーシアの一部は Thompson が暗に認めているわずかな例外の一つであるということを示すと思われる。

47 Schmidt, pp.116f.

ル Aka-Jeru が属している北アンダマン島人 North-Andamanese の神話は、フィリピンの神話がその一部をなすオーストロネシアの神話[48]に感化されているということを確信している。上で議論した神話の中では月が太陽に彼の子供たちを貪り食うように誘うが、貪食のモチーフは Schmidt の推論に特別な支持を添えている。

第二に、とても慎重ではあるのだが、エストニア人 Estonians、フィン人 Finns、そしてラップ人 Lapps の間で語られる、自分の子供たちを殺したいと望む母親という説話の中に太陽と月の間の諍いに関するこの所伝の最後の残存があるかどうかが問われよう[49]。エストニア人、フィン人、ラップ人が属するフィン—ウゴル Finno-Ugric 語族はムンダ語族に確かに近しいと考えられるため、この問いが問われるのである[50]。そうした問いを発することは正当であり、活気を与えはするがしかし、今日における真の課題はおそらくあらゆる利用可能なデータを収集し発表することであろう。

文献目録

*の付された著者については、下記一覧表以外の典拠から引用した。

- Barton, R.F., *The Religion of the Ifgaos.* Memoir Series of the American Anthropological Association, No. 65. Menasha, Wiscosin, 1946.
- Benedict* ,Laura Watson, "Bagobo Myths," *Journal of American Folk-Lore*, 26 : 13－63, 1911〔1913〕.
- ——, *A Study of Bagabo Ceremonial, Magic and Myth.* Vol.XXV of the annals of the New York Academy of Sciences. New York 1916.
- Beyer, H. Otley, "Origin Myths among the Mountain Peoples of the Philippines,"

48 op.cit., p.83. Schmidt はこの神話を matrilineal-Austronesian と呼ぶ。

49 Thompson, p.133.

50 Gottheiten, p.62, fn. 115〔正しくは fn. 155〕に Hevesy の"Neue finnisch-ugrische Sprachen" への言及がなされている。Schrader は、ムンダとフィン—ウゴルの言語の間の起源的関係が存在することを疑問の余地なく証明した功績が Henesy にあると主張している。(Hevesy の *Orientalistische Literaturzeitung*, 1935, cols. 637f. の論の論評)

The Philippine Journal of Science, 8 : 85－117, 1913.

- Bhaduri*, Manindra Bhusan, "Astronomy of the Mundas and Their Star Myths," *Man in India*, 2 : 69－77, 1922.
- Bodding*, P. O., "The Meaning of the Words *Buru* and Bonga in Santali," *Journal of the Bihar and Orissa Research Society*, 12 : 63－77, 1926.
- Census of India*, 1931, Vol.VII, Part I, Bihar and Orissa. Patna 1933.
- Cole, Fay-Cooper, *The Wild-Tribes of Davao District, Mindanao.* Field Museum of Natural History, Publication 170, Chicago 1913.
- ——, *Traditions of the Tinguian.* Field Museum of Natural History, Publication 180, Chicago 1915.
- Cole, Mabel Cook, *Philippine Folktales.* Chicago 1916.
- Dalton*, Edward Tuite, *Description Ethnology of Bengal.* Calcutta 1872.
- Elwin, Verrier, *The Baiga.* London 1939.
- ——, *Myths of Middle India.* Oxford 1949.
- Fansler, Dean S., "Philippine Folk Literature," *Philippine Magazine*, 34 : 208f., 226－28, May, 1937.
- ——, *Filipino Popular Tales.* New York 1921.
- Garvan, John M., *The Manobos of Mindanao.* Memoirs of the National Academy of Sciences, XXIII, Washington, D. C., 1931.
- Hevesy*, Wilhelm von, "Neue finnisch-ugrische Sprachen," Atti del Congresso di Linguistica tenuto in Roma 1933, Firenze 1935, pp.275－84.
- Hill, Percy A., *Philippine Short Stories.* Manila 1934.
- Jenks, Albert E., *The Bontoc Igorot.* Ethnological Survey Publications, I, Manila 1905.
- Lambrecht, Francis, "Ancestors' Knowledge among the Ifugaos and Its Importance in the Religious and Social Life of the Tribe." *University of Manila Journal of East Asiatic Studies*, 3 : 359－65, 1954.
- Martin*, Rudolf, *Die Inlandstämme der malayischen Halbinsel.* Jena 1905.

- Mills, J. P., *The Lhota Nagas*. London 1922.
- Mitra*, Sarat Chandra, "On a Far-travelled Star-myth," *Man in India*, 6 : 70 f., 1926.
- Monfrini*, Stefano, *La Tribù dei Santal.* Milano 1929.
- Monier-Williams, Monier, *A Sanskrit-English Dictionary.* Oxford 1888.
- Moss, C. R., *Nabaloi Law and Ritual*. University of California Publications in American Anthropology and Ethnology, Vol. 15, No. 3, 1920, pp.207－342.
- ——, *Nabaloi Tales*. University of California Publications in American Archaeology and Ethnology, Vol. 17, No. 5, 1924, pp.227－353.
- Norbeck, Edword, *Folklore of the Atayal of Formosa and the Mountain Tribes of Luzon.* Anthropological Papers, Museum of Anthropology, University of Michigan, No. 5, 1950.
- Rahmann, Rudolf, "Gottheiten der Primitivstämme im nordöstlichen Vorderindien." *Anthropos*, 31 : 37－96, 1936.
- Roy*, Sarat Chandra, *The Birhors.* Ranchi 1925.
- Russel* R. V. and R. B. H. Lal, *The Tribes and Castes of the Central Provinces of India*. 4vols. London 1916.
- Sals, Florent Joseph, "Primitive Education among the Ifugaos : Religious and Moral," *Philippine Studies*, 3 : 70－89, 1955.
- Schebesta* Paul, "Uber die Semang auf Malaka." *Anthropos*, 18－19 : 1002－11, 1923－24.
- ——*, *Bei den Urwaldzwergen von Malaya.* Leipzig 1927.
- ——*, *Orang Utang. Bei den Urwaldzwergen Malayas und Sumatras*. Leipzig 1928.
- Scheerer, Otto, "Sagen der Atayalen auf Formosa." *Zeitschrift für Eingeborenen-Sprachen*, 23 (2－3) : 1－71, 1932.
- Schmidt, Wilhelm, *Der Ursprung der Gottesidee*. Vol.III, Münster 1931.
- Schrader*, F. Otto, review of Wilhelm von Hevecy, "Neue finnish-ugrische Sprachen." *Orientalistische Literaturzeitung*, 1935, cols. 637f.

・Thompson, Stith, *The Folktale.* New York 1951.
・Thurston*, Edgar, *Castes and Tribes of Southern India,* Vol. VI, Madras 1906.
・Vanoverbergh, M., "Religion and Magic of the Isneg, Part IV : Other Observances," *Anthropos*, 49 : 1004－12, 1954.
・Warneck* , Joh., *Die Religion der Batak.* Leipzig 1909.
・Wilson, Laurence L., *Apayao Life and Legends.* Baguio 1947.

ルドルフ・ラーマンの経歴とその著作　（訳出の補足として）

ここに訳出したのは1955年の *Folklore Studies* vol. 14に寄稿された Rudolf Rahmann, Quarrels and Enmity Between the Sun and the Moon. A Contribution to the Mythologies of the Philippines, India, and Malay Peninsula である。訳出に際して、原文中の引用文献頁の誤記などについては正しい頁を訳文中に〔 〕で示した。また民族名および固有名詞等についてはカタカナ表記の後にアルファベット表記を載せたが、引用諸文献の著者名についてはアルファベット表記のまま記載した。

本訳稿は、フィリピン、インド、およびマレー半島における太陽と月が同時に空に現れないことを両者の諍いが原因であるとする説明神話についての比較研究である。挙げられている諸神話は、太陽と月が同時に現れないということの他、昼間に星が出ない理由や月の黒斑の理由、月の満ち欠けの理由などについての説明神話でもあり、興味深い要素が多分に含まれている。ラーマンが引用している Elwin の *Myths of Middle India* でも太陽と月の諍いの話が幾つか挙げられているが、ラーマンが本訳稿においてこの一神話群に着目し、３つの地域について比較的にみたことは重要な仕事であった。また、ラーマンは30代半ばから中国へ渡り、その後もフィリピン大学で教鞭をとる傍らフィールドワークを行なうなどアジア各地での精力的な活動が本訳稿の背景にある。以下ラーマンの経歴について略記するとともに、その著作を示すことで本訳稿の補足としたい。

ルドルフ・ラーマンの経歴

ルドルフ・ラーマンは、1902年９月20日ドイツのニーダーエンゼに生まれた。13歳でオランダの聖ミヒャエル宣教神学校へ入った彼は、1922年の卒業試験（Matura）を終えると神言修道会（Societas Verbi Divini）に加入した。その後聖ガブリエルプリースターゼミナールにおいて神学を修学し、1929年に司祭に叙階された。ザールの聖ヴェンデル宣教神学校のギムナジウムにおいて教師として３年働いたのち、ウィーン大学で副専攻としてO.Menghinのもとで先史学とJ. Weningerのもとで自然人類学を学ぶとともに、W. KoppersとW. Schmidtのもとで民族学の研究を始め、1935年に博士号を取得した。

Schmidtにその才を認められたラーマンは、若くして雑誌*Anthropos*の編集を任されることになったが、1936年には北京のカトリック大学の学長に任命されて中国へ渡った。しかし、1937年には北京が日本に占領されるなど、第二次大戦の過酷な状況下においての滞在となった。大戦の終結後に学長を退任したラーマンは新学長の援助などをしていたが、1949年に中国を離れ、休養と研究のためにスイスに滞在し始めた。そして、２年後にフィリピンのセブ島にあるサン・カルロス大学へ招聘される。そこで彼はミンダナオ島、ネグロス島、パナイ島での調査の機会を得ることになった。

しかし、1955年にアントロポス研究所Anthropos–Institutに呼び戻され、1956年にスイスのフライブルク大学へ招聘されて民族学の教授の職に就き、1957～58年には哲学部の学部長に就任した。この頃に彼はフィリピン南部についての研究成果を論文として発表した。そして、1960年に再びフィリピンに戻ってネグリトなどのもとで研究を再開し、また民族学、教育学、哲学における博士課程の指導も行なった。1964年から1970年までサン・カルロス大学の学長を務め、その任期が終わってもフィリピン人である後任者を援助し、ヨーロッパ諸外国との関係性の継続のために尽力した。1977年以降は再びフィリピンを離れ、アントロポス研究所に身を置いた。

ルドルフ・ラーマンは1985年９月23日にトロイスドルフにおいてその生涯に幕を下ろすが、彼の功績は故郷ニーダーエンゼの名誉市民として顕彰されたほ

ど大きく、その多岐にわたる影響力は学術関係のみならず出版の分野にも及んでいる。彼は *Anthropos* の編集を度々手掛けた他、*San Carlos Publication*（1964－）や *Philippine Quarterly of Culture and Society*（1973－）などを創始し、その編集者でもあった。また自らのフィールドワークによって取材した著作も数多い。最後にその著作リストを挙げる。なお、リストはBurgmannから引用した［Burgmann, 1977：373－375］。

著作リスト

1936 Gottheiten der Primitivstämme im nordöstlischen Vorderindien. ［Dissertation.］ Anthropos 31：37－96.

1948 Remarks on the Sacrifice to Heaven of the Na-Khi and Other Tribes in Southwest China. *Monumenta Serica* 13：395－408.

1952 The Ritual Spring Hunt of Northeastern and Middle India. *Anthropos* 47：871－890.

1954 The Fourth Far-Eastern Prehistory Congress Quezon City and Manila, November 16－28, 1953. *Anthropos* 49：687－688.

1955 Bow and Arrow of the Visayan Negritos.（With Marcelino N. Maceda.） *The Philippine Journal of Science* 84：323－333.

Notes on the Negritos of Northern Negros.（With M. N. Maceda.） Anthropos 50：810－836.

Veröffentlichung des Nachlasses von P. Wilhelm Schmidt und Würdigung seines Lebenswerkes. *Anthropos* 50：958.

Quarrels and Enmity Between the Sun and the Moon. A Contribution to the Mythologies of the Philippines, India, and Malay Peninsula. *Folklore Studies* 14：202－214.

1956 Research in the Philippines.（With Heinrich Schoening, S. V. D.） *Worldmission* 7：89－93.

Fünfzig Jahre „Anthropos". Anthropos 51：1－18.

A Thunderstorm Blood-Offering of the Mamanua Negritos of Northeastern Mindanao. In : Die Wiener Schule der Völkerkunde. Festschrift zum 25 jähringen Bestand 1929－1954. Wien 1956 : 368－371.

Burial in a Standing or Sitting Position among Philippine Negritos. Anthropos 51 : 741－742.

1957 Schüler und Mitarbeiter von P. Wilhelm Schmidt : Martin Gusinde, Wilhelm Koppers und Paul Schebestá siebzigjährig. *Zeitschrift für Ethnologie* 82 : 273－276.

Vier Pioniere der Völkerkunde. Den Patres Paul Arndt, Martin Gusinde, Wilhelm Koppers und Paul Schebesta zum siebzigsten Geburtstag. *Anthropos* 52 : 263－276.

1958 Some Notes on the Negritos of Iloilo, Island of Panay, Philippines. (With Marcelino N. Maceda.) *Anthropos* 53 : 864－876.

1959 Shamanistic and Related Phenomena in Northern and Middle India. (Translated into English by J. E. Mertz, S. V. D.) *Anthropos* 54 : 681－760.

1962 Notes on the Negritos of Antique, Island of Panay, Philippines. (With Marcelino N. Maceda.) *Anthropos* 57 : 626－643.

1963 Folklore and Folk Life. *Philippine Sociological Review* 10 : 176－181.

The Negritos of the Philippine and the Early Spanish Missionaries. In : Festschrift Paul Schebesta zum 75. Geburtstag. (Studia Instituti Anthropos, 18 : 137－157.) Mödling bei Wien.

Visayan-Mindanao Sociological Conference. *Current Anthropology* 4 : 224－225.

The Problem of the Culture Circle (in Chinese ; translated by Dr. Tu Erwei). *Contemporary Thought Quarterly* (Taipei) 2 : 147－151.

Shifting Cultivation and Notions on Landed Property. *Philippine Sociological* Review2 : 38－44.

1964 Research Possibilities in the Visayas. *The Philippine Association for Graduate*

Education 1964 (June) : 30－37.

A Brief Review of Archaeologycal Field Work Undertaken by the Department of Anthropology, University of San Carlos, Philippines, During the Years 1961－64. (With Rosa C. P. Tenazas.) *Bulletin of the Department of Archaeology and Anthropology* (Taipei, National Taiwan University) 1964 : 46－51.

1965 Animal Horns and Similar Motifs in Filipino, Eurasian, and American Folklore. (With José Kuizón.) *Asian Studies* 3 : 403－419.

1966 The Beyer Symposium at Quezon City (Philippines). In Memoriam. *Anthropos* 61 : 874－875.

1967 Our Responsibilities Toward the Cultural Minorities. *The Journal of American Chamber of Commerce in the Philippines* 51 : 322－328. －Auch veröffentlicht in : Studies in Philippine Anthropology (In Honor of H. Otley Beyer), edited by Mario D. Zamora. Quezon City 1967 : 443－462.

1973 Field Work Among the Negritos of Northern Negros : An Additional Report. (With M. N. Maceda and R. L. Lopez.) *Philippine Quarterly of Culture and Society* 1 : 149－166.

1974 Magico-Religious and Medicinal Stones : A Case Study in Ethnomedicine. *Philippine Quarterly of Culture and Society* 2 : 81－85.

The Horn Motif in Mythology and Folklore with Special Reference to the Philippines. *Philippine Quarterly of Culture and Society* 2 : 103－114.

1975 The Philippine Negritos in the Context of Research on Food Gatherers during this Century. *Philippine Quarterly of Culture and Society* 3 : 204－236.

参考文献・URL

・Burgmann, Arnold, Rudolf Rahmann SVD zum 75. Geburtstag, 1977, *Anthropos* 72 : 371－375.

・「Schutzenbruderschaft Niederense e.V.」

http : //www.schuetzen-niederense.de/sn/bruderschaft/ehrenmitglied_rahmann.php

(2011／07／07閲覧)

最後になりましたが、ラーマンの原著を紹介して頂き、またラーマンの経歴およびその著作に関する資料の援助と助言を頂いた山田仁史先生に感謝の意を表します。